

息子さんが潰瘍性大腸炎になったとき医者である  
お父様がどのように行動されたのか

「松本医院が潰瘍性大腸炎の標準治療になります  
ように」 匿名希望 (医者 内科・お父様記述) 13歳

2015年11月5日

お父様 (内科医) による手記

(診断)

息子が潰瘍性大腸炎と診断されたのは平成27年3月20日のことでした。その日、某国立病院にて大腸カメラ検査を受けたところ、医師は家内に「十中八九、潰瘍性大腸炎であり、クローン病の可能性を否定するため、カプセル内視鏡をやりましょう」と言ったそうです。家内はショックで夕食を作る元気も無くなり、息子も落ち込んでいると電話で聞きました。正直私も潰瘍性大腸炎であることは覚悟していたとは言え、クローン病までは考えていなかったのが相当ショックでした。とりあえず夕食を買って帰り、二人を励ましましたが、“小児でこれらの病気になると、予後が悪い”ということを知っていましたので、まさに「これからの残りの人生、地獄の門の前に立たされた」気分でした。

(発症)

生来息子は元気な方で、学校もあまり休むことはありませんでした。便もどちらかというと便秘気味で、あまりトイレに行く方ではありませんでした。異変が起きたのは、中学受験のため塾へ通っていた6年生の11月中旬のことでした。最初、熱と下痢があり、急性腸炎の様な症状だったのですが、数日で熱が下がっても下痢が続くようになりました。12月に入ると血便も出るようになり、近所の小児科を受診したところ「過敏性腸炎+痔だろう。」と言われ、整腸剤だけ処方されました。

その後も下痢は治まりませんが、入試直前であり、その時は症状もそんなにひどくなく、本人の希望もあり、病院には行きませんでした。なんとかおむつをしながらも第一志望校に合格し、「これでストレスが無くなれば、自然に症状も無くなるかもしれない」と安易に考えていました。受験が終わり、2

月は本人もあちこち遊びに行ったりして楽しんでいましたが、段々症状が頭をもたげて来ました。1日3回くらいだった下痢が8回くらいになり、血便もほぼ毎日出るようになりました。2月の末には小学校に行く途中で便失禁したり、気持ち悪くなったりして学校を休むようになり、本人もさすがに「これはおかしい。」と感じ出したのか「病院に行きたい。」と言い出しました。

3月10日には地元の中規模病院の外科で痔が無い事が判明し、件の国立病院を紹介されたのでした。

(松本医院へ)

実は2月頃より薄々潰瘍性大腸炎だろうと思っていましたので、色々ネットで調べていたところ、「高槻市にある松本医院と言う所で10歳の男の子が良くなった」というお母さんの手記を見つけました。松本医院のホームページで院長の理論や患者さんたちの手記を暇さえあれば読み漁りました。このまま西洋医学の治療を受けていても一生治らないのであれば、松本医院の「完治」という言葉にかけてみたいと思いました。松本先生は自分以外の免疫を抑える医者を敵対視しており、受診するのは少し勇気がいりましたが、「子供が治るのなら」と思い、思い切って行くこととしました。ただし、誤解してもらっては困るのは、私を含め世間一般の医者が、松本理論を知っていて患者さんに免疫を抑える薬を使っているのではないということです。もちろん、すべての医者がステロイドや免疫抑制剤が身体に悪い事は百も承知です。しかし、それが標準治療だと教わって来ているので、何の疑問も持たずに使って来たのです。ですから松本理論はまさに“目からうろこ”でした。

3月23日、新幹線で京都に行き、京都に一泊して翌24日、松本医院を受診しました。非常に混んでいて1時間半以上待った後、初めて松本先生にお会いしました。想像していた感じとは違って柔和な感じで、いかにも関西人らしいユーモアとパワーのある方でした。先生は「潰瘍性大腸炎もクローン病も一緒やから、わざわざカプセル内視鏡をやる必要はない。」とおっしゃいました。現代医学を散々批判している間にも携帯に患者さんからバンバン電話がかかって来ました。いい調子で話していたのですが、ふと保険証から私が医者であることに気付くと顔色が変わりました。「どうして自分の所の病院に行かないの?」と。「まずい!」と思いましたが、「西洋医学は免疫を落とすからです。」と答えたら、急ににっこりして握手を求めて来ました。子供や家内も何回も握手してもらい、最後は「君はいい人や!」と言って頂きました。

(治療開始)

早速、その夜から漢方薬を煎じて飲み始めることになったのですが、これが思っていた以上に大変でした。食前の下痢止めの薬が相当まずく苦いらしく、泣きながら飲んでいたので、飲み終わるのに1時間くらいかかりました。しかし、その後は段々早くなり、すぐに一気に飲むようになりました。

春休みの間、段々下痢や血便が治まり、食欲もアップしました。全く西洋医学の薬を飲んでいなかったものですから、「これは2カ月位で治るんじゃないか?」と思ったりしました。しかし、4月に入り、学校が始まってから、また、血便や下痢となりました。

その後、5月上旬から7月上旬にかけて両下腿を中心にアトピーが出ました。同じ頃、血便が減り、出ないことも多くなりました。それから夏休みまで一進一退の状態が続きました。夏休みに入りストレスから解放されたせいも、また、症状が改善して来ました。最初は食事に気を付け、一般的に潰瘍性大腸炎にいいとされる食べ物を食べていたのですが、夏休み中は、時には焼肉やアイスクリームも連日食べ、それなりに便が緩くなったり、回数が増えたりしていましたが、「食事制限をあまりしていないことを考えると1学期よりは良くなっているのでは?」と感じました。

しかし、9月に入り2学期が始まると、また、症状は悪化しました。以前は就寝中にトイレに行くことはなかったのですが、下痢の回数もトータル1日十数回に増え、夜間も1、2回トイレで起きる日が数日続きました。

ところで今まで血便や下痢や便の回数のことばかり書いてきましたが、実は潰瘍性大腸炎になって何が一番辛いかと言うと御存知のように便失禁なのです。息子は弱音を吐くタイプではないので言いませんでしたが、連日漏らすためおむつシートをして学校へ行っていました。それでもひどい時は制服のズボンや靴下まで汚して帰って来ることがありました。

今、思うと5月と9月に2回リバウンドを経験した感じがします。正直リバウンドの時期は「本当に治るのだろうか?」「結局良くなったり悪くなったりしながら一生付き合っていかなければならないんじゃないか?」と暗くなることもありました。しかし、そういう時は松本医院のホームページを開き、理論や皆さんの手記を何度も読み返し、「いや、絶対治る!」と気持ちを奮い立たせました。

そして、10月の末に便の回数が急に4回以下となり、固まった便が出るようになりました。おならも出るようになり、便失禁もほとんど無くなりました。最近では食事でも、焼肉でも、中華でも、アイスクリームでも、辛いもの以外は何でも食べています。今、思うと最初この病気になったばかりの頃は自宅にいてもトイレが間に合わず、廊下に粘血便を漏らしたりしていました。また、自分が家に帰ると決まってトイレの明かりが煌々と点いていて、なかなか出て来ず、暗澹たる気持ちとなっていました。本当に少しずつ薄皮を剥ぐ様に良くなって行くためわかり辛いのですが、「免疫を上げさえすれば人間は自分の身体を自分で治すことができるのだ」ということを実感しました。11月5日現在、あとちょっとかなと思います。完治の前兆である便秘になったらカレー、ペンネ、ジャージャー麺といった、以前なら血便となっていた食べ物に卒業試験として挑戦してもらいたいと思っています。

## (考察)

私は内科医ですが、消化器や膠原病専門の医者ではありませんので、恥ずかしながら潰瘍性大腸炎という病気はあまり詳しくは知りませんでした。国家試験レベルで難治性、粘血便、サラゾピリンというキーワードを知っているくらいで、後は安部総理がこの病気であることを知っているくらいでした。

教科書的には非常に頻度の少ない病気であると書かれており、自分自身も臨床でほとんど遭遇することはありませんでしたので、まさか自分の子がこんな頻度の低い病気になるとは夢にも思いませんでした。しかし、最近、外来をやっていると別の理由で来た20～40代の患者さんで、既往にこの病気がある人が結構います。ですから最近の実際の罹患率は、公表されているものよりかなり高いのではないかと思います。

また、同様に他の膠原病も若い人に増えている気がします。若い人がなっても決して珍しくはありません。病気が増えて良い訳がないのですが、この手記を御覧になっている方は、症状の辛さだけでなく、難病というレッテルを貼られ、「何で自分だけが?」「何で自分の子供だけが?」と孤独感に打ちのめされている方が多いと思います。病気は同病者が沢山いて、「自分だけじゃない」ということが分かると、それだけで苦しみは大分減るものですから昨今の医療事情をお伝えしました。

便はデリケートな問題なので、人知れず悩んでいる人は多いと思います。潰瘍性大腸炎を医学書で調べると原因不明、難治性、再発・寛解を繰り返す。内科的治療に反応しない場合や、穿孔、巨大結腸症等では大腸切除の適応となる。であるにもかかわらず、予後良好とあります。この病気は「自分の免疫が自分の大腸を誤って攻撃するために症状が起きる自己免疫疾患である」と認識されています。そのため「自分の免疫を抑えてしまえば症状は抑えられるので、ステロイドや免疫抑制剤を使いましょう」ということです。「この病気は治療しないで放っておくと、どんどん悪化して手遅れになる」という恐怖感が、西洋医学の治療へと走らせてしまうのではないのでしょうか?一般の人のみならず大半の医者までもが、西洋医学の標準治療を絶対視し、王道であると信じて疑わなくなっているのです。

しかし、標準治療で使われるステロイドや免疫抑制剤は、強い副作用を持っており、しかも症状を抑えるだけ(全然効かないこともある)で、根本的な治療薬ではないのです。治らないのに確実に副作用が起きる薬より、ほとんど副作用の無い漢方薬の方が、この病気に関しては、はるかに優れていると思います。潰瘍性大腸炎は全く怖い病気ではありません。ストレスにより一時的に免疫の機能が落ちたことにより起こる免疫の暴走なのです。従って根本的治療は免疫を更に落とす西洋医学の薬ではなく、免疫の本来の機能を回復させることなのです。そうすれば、自己の免疫は化学物質との戦いを止め、症状を劇的に回復していくのです。その姿はあたかもエラーとなっていたパソコンが自分でエラーを修復したり、埃っぽくなった冷暖房がクリーニングとなって自分で自

分を掃除したりしていく様に似ています。人間の免疫はこれらの機械よりはるかに精密にこの作業を行ってくれるのです。

人間ならば例外はありません。「漢方が効く人と効かない人がいる」などとおっしゃる方がいますが、漢方は免疫を上げ、多少症状を抑えているだけで、根本的には治してくれるのは自分の免疫だけなのです。この病気に関して西洋医学の薬は「百害あって一利なし」です。この病気で苦しみ、あるいは御家族や周りの方が苦しんでいる方はすぐに松本医院に御相談ください。本来、潰瘍性大腸炎の標準治療が漢方を中心とした免疫を上げる薬に代われば、何も皆さん悩む必要は無いと思うのですが、そうなるのにはまだまだ、時間がかかるでしょう。しかし、そのうち松本理論で「俺も治った!」「私も治った!」という人が増えてくれば、ネット社会ですから民衆の力が大きくなうねりとなって、標準治療と認めざるを得なくなるでしょう。

最後に松本先生、本当にありがとうございました。松本先生は特に免疫学、英語、漢文の力が卓越しておられ、まさに天才だと思います。これからもお身体に留意され、益々のご活躍されることを祈念致します。そして明るいスタッフの皆さん、色々ありがとうございました。あと少し御世話になります。松本医院を初めて受診してから7カ月が過ぎ、我々家族はいつのまにか「天国の門」の前に立っています。